

初めての「牧之原市いじめ問題対策連絡協議会」が開催される

5月11日、市や学校、警察や児童相談所など関係機関が、いじめ問題に対して連携し対策を話し合う「牧之原市いじめ問題対策連絡協議会」が初めて開催された。会では「一致しにくいいじめの認識」「子どもの心の健全育成」について熱心な議論が交わされた。

市の状況は？

昨年度、市教委に報告があったいじめ認知件数は全70件。このうち66件が「ひやかし・からかい」など軽微なものだった。しかし会では「ささいなきっかけでも重大な事態に発展するおそれがある



今後の取組は？
市教委では、各中学校で「スマートフォン」「リテラシー講演や、子ども自身がいじめに負けない子ども集団づくりのスローガン」を考えた電柱に掲示する取組などを行う。各校では、学校いじめ対策基本方針「の共通理解と実施。年度終わりの点検・改善を行っていく。

「今は成人した子どもが、小学校の時のいじめにあっていた。いじめていた子どもたちはふざけ半分にやっていた。被害を受けたわが子は、その後中学校、高校とずっと自分の無力感や人への不信感に

被害者と加害者の認識のずれ

「いじめへの指導で難しいのは、自分の価値観では間違っていたことをしていない」と信じ切っているいじめた子に、その子の価値観の不全さや姿勢の問題点を理解させた上でないと、いじめられた子の気持ちや感じ方に寄り添って理解することができないという点がある。」



「昔の子どもも、理不尽ないやがらせや力関係の乱用などのひどい目にたくさんあっていた。しかし今の子どもは耐性が弱く、精神的に深刻な危機に陥ってしまい、やむなく大人が介入するケースが非常に多い。」

また先生も、カリキュラムをこなすのが大変で、忙しさのあまり子どもたちの声を聴き取る感性が鈍ることもある。教師も子どもも、もつと心にゆとりがもてる学校にしている必要がある。そのため地域が理解と協力をしていく必要がある。」



グループ協議

「市の課題と対策」

学校編

グループ協議では「市の子どもたち、家庭、学校、地域社会でいじめに負けない子どもを育てる上での課題は何か？」と「課題への対策」について話し合った。

苦しんで育った。

「現代は子どもも大人も『多様な価値観の尊重』の美名のもと、人とぶつかって自分の価値観を揺さぶられる機会を避けているのではないのか。対話というが、大人だっただけで対話ができない。違う意見をぶつけあつて調整したり、考え方を転換したりすることができない。まず大人が積極的、建設的に人と関わる姿を見せることが大切。」

人と関わる力や、姿勢の減退

常に増えているのではないのか。」

2017年5月21日
発行

牧之原市教育委員会

子どもたちに自己肯定感、自治の力を育てよう

「学校では、子どもに任せて自分たちで課題解決する」などの機会をもつともつべきではないか。

だが学校は現在『超』がつくほどの過密スケジュールであり、実際は子どもたち自身に任せて解決する学級活動などの時間がとれない問題がある。

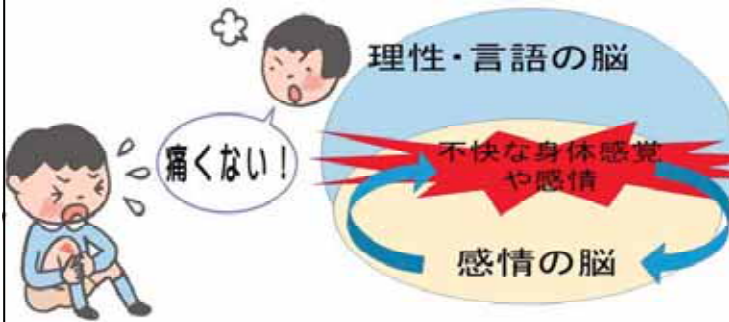
「感情教育」の重要性

教育委員会からは、家庭での「感情教育の重要性」の説明がありました。

いじめの子は何かのストレスを感じていて、その間違った表現としていじめをしているケースが多く見られます。

幼い頃からネガティブな感情を子どもが表現した時、安定した大人が安心を与え、「悲しかったね」などと言語化することで、自分の感情をコントロールできる力が成長とともに育っていきます。

泣かない「よい子」が将来心配な理由



グループ協議

「市の課題と対策」

「家庭編」

「親業」の重要性

「3歳児の親教室に参加する親が大幅に減っている。」

インターネットで情報を得て極端な情報を鵜呑みにする保護者も見られる。近所や親族には親業の先輩がたくさんいる。もっと生の声をたくさん聞いて子育てをしてほしい。

「子どもを産んでも早くから仕事に復帰せざるをえない母親が増えている。（保育の早期化）忙しく子どものベイスに合わせられない保護者も増えている。行政の経済的支援が必要だ。また親が「子ども受容の大切さ」などを学ぶ場も減っているのではない。母子手帳交付の時に説明していく機会がとても重要になっている。」

「子どもの育ちの共通目標」による連携を！

「市の関係機関（健康推進課、子ども子育て課、保育園幼稚園）が「子どもの育ちの共通目標」をつくって、子どもと保護者を一貫して支援する仕組みを作りたい。」

次回からライフステージごとに、市ではどの時期にどの機関が何をやっていくのかを出し合い、課題や対策をまとめたらいのではないか。」



「牧之原市いじめ対策本部」会議より

五人の専門家（弁護士・医師・元大学教授・臨床心理士・社会福祉士）から構成される牧之原市いじめ対策本部の委嘱状交付式も五月十五日に行われました。専門家の方々にも「子どもの心育成上の課題」と「対策」についてご意見をいただきました。

「なぜ助けを求められないのか？」

自殺する子が後を絶たないのは、日本には大勢に合わせるものが習慣になっていて、流れに逆らっても発言できる教育がなされていないからである。

「集団からはみ出すことへの偏見」

地区や子ども集団の中にまだ「発達障がい」などへの理解が足りない。互いのよさを認め合い、競争ではなく協力できる集団を育てる必要がある。

「自己肯定感」「発達障がい」などの言葉

は「わかったような気になってしまふ言葉。」「発達障がい」は例えば「特性」とするなど子どもにも落ちるような言葉へと、意味をほり下げて変えていくべきではないか。

「学校以外の機関との連携を」

「子どもの貧困」など学校だけで解決できない課題が増えている。福祉機関などと連携をしていきたい。

「聴くこと」「受け止めること」

人の話を最後まで聴くこと。また自分と違う考え方でも理解しようとする姿勢を教育してほしい。

